

平成 22 年度公立高校入試問題の傾向 社会

●地理分野の傾向

- ・例年通り，グラフ・表などの初見の統計資料を読み取る問題が主流。いくつかの資料を複合させて考えさせる問題や複雑な読み取りが要求される問題も引き続き出題されており，年々難度が高くなっている。
- ・資料から読み取ったことがらを短文記述で答えさせる問題がやや少なくなり，読み取れることがらについて述べた文章の記号選択の問題が増えている。
- ・一方で，果実の生産量上位県名を示した表をもとに地図中の該当県を塗りつぶさせて都道府県の位置を確認する問題など，基礎的な問題も複数県で出題されていた。

●歴史分野の傾向

- ・昨年同様，単に個々のできごとの理解を問うのではなく，歴史史料や歴史のできごとの年代順の並び替えをさせることで，できごとの原因・結果などといった歴史の流れの理解を問う問題が，かなり多く出題されていた。
- ・近年の傾向として，地歴融合問題の一種である歴史地図に関する出題も複数県でみられた。

●公民分野の傾向

- ・政治では「裁判員制度」，経済では「社会保障制度」「デフレーション（デフレスパイラル）」「食料自給率」，国際社会では「環境」「ハイブリッドカー」などの時事的なことがらをトピックにした出題が多く見られた。
- ・経済分野では，「円高・円安」に関する問題が昨年よりも増えていた。実際の為替の値動きをもとに，「円高・円安」のしくみを考えさせる高度な出題も見られた。
- ・ごみと資源の問題など，社会問題の現状を資料から読み取らせて記述させる問題も出題されていた。

●全体的な傾向

- ・地理では複数の初見資料から特徴を読み取る力，歴史では歴史の大きな流れや因果関係についての理解力，公民では公民的知識を用いて身の回りの事象や社会問題を読み解く力，が問われる傾向にある。
- ・資料を読み取る問題がさらに増えており，思考力・総合力を問う傾向がはっきりとしている。
- ・課題を調べるために必要となる資料の内容を書かせたり，地形図を比較する際のポイントを書かせたりするなど，答えが一つに定まらない問題も複数県で出題が見られた。
- ・問題の場面設定を生活に置いた問題が例年より多く見られており，社会科で学習した知識を基に，自分の身の回りで起きているできごとを考察する力が問われている。

以上の入試傾向を受け，基礎基本の知識の確実な定着，およびそれらの知識を基にして，現状や今おきている社会問題を読み解く社会の総合力の育成を，今後の社会科の目標として教材製作に反映させていきたい。